

第7回（2014年）「昭和女子大学女性文化研究賞（坂東眞理子基金）」選考報告

昭和女子大学女性文化研究賞選考委員会

（1）選考経過

2014年度第7回「昭和女子大学女性文化研究賞」の選考対象は、自薦・他薦を含む単著と共著32点であった。

第一次選考は、2月4日、3月4日の両日に、学内選考委員によって行われ、候補作として次の単著2点を選んだ。

澤田佳世『戦後沖縄の生殖をめぐるポリティクス——米軍統治下の出生力転換と女たちの交渉』（大月書店 2014年2月）

河上婦志子『二十世紀の女性教師——周辺化圧力に抗して』

（御茶の水書房 2014年12月）

これら候補作2点について第二次（最終）選考は4月10日に、学外選考委員の早稲田大学大学院法務研究科教授・浅倉むつ子氏と内閣府男女共同参画局長・武川恵子氏の出席のもと、女性文化研究賞選考委員会にて行われた。検討の結果、男女共同参画社会形成の推進に寄与するという賞の趣旨に、より合致するとして、河上婦志子氏の著作に第7回「昭和女子大学女性文化研究賞」を贈呈することに決定した。

（2）選考結果

第7回（2014年度）「昭和女子大学女性文化研究賞」受賞作

河上婦志子『二十世紀の女性教師——周辺化圧力に抗して』

（御茶の水書房 2014年12月）

（3）受賞作の選考理由

本書は、20世紀という長いタイムスパンで、日本の公教育制度における女性教師、即ち戦前では尋常・高等小学校、戦後では小・中学校の女性教師を対象にし、「女教師問題」とは何であったのか、という問いを解明しようとする労作である。オーソドックスな実証的資料分析を方法として、女性教師の活動や声、置かれた状況とその背景を概観し、「女教師問題」を論じている。

著者は、大阪大学文学研究科博士課程修了後神奈川大学に奉職、カナダ・オンタリオ教育研究所客員研究員を経て、現在神奈川大学名誉教授である。本書は2014年に大阪大学より博士号を取得した論文に、修正を加え出版されたもので、第I部「周辺化と収奪の軌跡」で戦前、第II部「脱周辺と解放への道程」で戦後を扱う2部構成をとっている。

近年は研究者の層も世代交代が著しく、伝聞を含めても戦前の女性教師の現場の体験を

知る者は少なくなりつつあるなかで、100年という長さにわたってこの問題を論じた本書の価値には高いものがある。またさらに、女性教師問題の過去や女性管理職の少なさの問題等を論じることで、これから職場進出しようとする一般の女性たちが直面している、現代の諸問題に通じる問題提起になっている点が、評価された。

「女教師問題」言説は、女性教師を周辺化することで、女性教師に職場での主婦役割を引き受けさせ、献身・自己犠牲・奉仕を余儀なくさせ、女性教師自身にとっての「問題」となり続けてきた。本書では「女教師問題」を問題視する際の2つの視点として、第1に、女性教師の増加を憂慮する「増加問題」言説を、第2に、女性教師が抱える、職業生活と家庭生活の二重負担を危惧する「両立問題」言説を抽出している。

戦前の「増加問題」言説は、女性教師比率3分1説である。「両立問題」言説は全国小学校女性教員大会での「部分勤務制」の提唱で、優れた分析がなされている。2つの問題言説は、それぞれ戦後も登場した。その背景に、著者はさらに深く3点を考察している。第1点は、日本の公教育の目的を「戦士の教育」と看取する。教育の対象は男子生徒であり、担い手は男性教師とされたということである。第2点は「性別の優位」で、性別によって地位や機会を配分する慣行である。第3点「性別役割」は、女性の本来の居場所を家庭とするものである。著者の「母性」という概念装置の機能分析には鋭いものがある。戦前の「母性イデオロギー」のみならず、1950年代には女性教師と母親を「母性」によって結びつけた「母と教師の会」の成立を見た。

ところで、1980年代以降、学校と教師に対する生徒や親の変化が起こり、「女教師問題」はもはや論じられず、「問題教師」言説に溶解していったように見えている。また「1.57ショック」やフェミニズムの影響などによる変化は、女性の価値を子産み・子育てだけでないとする女性を出現させていた。しかしいまだ、学校での管理職への排出格差の問題などに明瞭に性別優位の慣行が残存している。

展望としては、3点挙がっている。第1に、男女両性の生徒を平等で自立した、職業生活と家庭責任を果たせる市民に、育成する教育の可能性。第2に、「ワークライフバランス社会」の提唱。第3に、女性教師だけの組織の自律的な運営の提起である。

このように、30年来の問題意識に支えられた、長年の堅実で実証的な研究の集大成として、研究の厚みを感じさせる力作である。

一方、澤田佳世氏の『戦後沖縄の生殖をめぐるポリティクス』は、国際関係論や人口学にポスト構造主義のジェンダー視点を投入して、精緻な理論的枠組みと調査方法によって検討を加えた秀作で、学問的スケールが大きくオリジナリティの高い意欲作である。今後の研究のさらなる進展・続行に期待する声が高かった。